【北海道税理士会　小樽支部支部長賞】

税金が繋ぐ命の輪

小樽市立菁園中学校　三年

栗原　拓希

「もし税金がなかったら・・・」

そう思うことはないだろうか。私達の通う学校、毎朝来るごみ収集車、町を守るパトカー。これらはすべて税金あってこそのものだ。もし税金がなかったら。お金持ちしか学校に行けず、ごみも集めてえないし、パトカーもしらんぷり。そんな世界、私は嫌だ。

では、誰が税金を払っているのか。まず間違いなく、今この瞬間も汗を流して働いている「大人」達である。私達は改めて彼らに感謝すべきである。

数えきれない人々が私達のために日々税金を納めている。では、税金はどのように使われているのだろうか。私は一つに注目する。

それは、税金が最も多く使われる、「社会保障関係費」だ。これは「歳出総額」のうち三十三・七パーセント、額にしておよそ三十六兆二千七百三十五億円を占めるものだ。これは私達の健康や生活を守るために使われる。

例えば、私たちが病気やケガで病院へ行ったとき、中学生ならば負担額は医療費のわずか二割。残りの八割はこの「社会保障関係費」によって賄われている。日本人一億二千万人の命はこれによって守られているのだ。

もし、これがなかったら。考えれば恐ろしい。日本は経験したことがないが、実際の例で考えてみる。一九九一年。「ソビエト社会主義共和国連邦」が崩壊する。それまで文字通り、労働者のための共産党が一党支配する社会制度を有していたソ連。しかし、国が崩壊し、社会保障がストップした先に待っていたのは悲惨な数字のオンパレードであった。男性の平均寿命は約七歳、女性は約三歳短縮。年間死者数は三百二十万人増加。ついには、出生数と死亡数の逆転。これでは生きられる人も生きられないではないか。

この恐ろしい数字を日本に当てはめるとどうなるか。やはり、毎年百四十万人の死者が増加してしまうことになる。こう思う人もいるだろう。

「そんな日が日本にくるはず・・・」

ないだろうか。私は来てもおかしくないと思っている。

現在、日本では急速に少子高齢化が進んでいる。私の住む小樽市でも先日、人口が十一万人を切ったことが話題となった。そんな日本では、近年、社会保障の給付と負担が経済の伸びを上回って増大すると見込まれている。これは、ソ連が歩んだ道への入り口だ。日本が将来にわたり、社会保障性を安定的に持続させるためには、制度の構図改革を進める必要がある。

しかしこれを政府に頼っていては何も変わらない。次の時代を担う私達が、税金についてよく知り、小さな節約などの努力を積み重ねていくことが、次の世代、いやその次の世代の「大人」を育てていくことになるのではないだろうか。